

漢語形容動詞についての一考察

原 田 登 美

目 次

はじめに

1. 漢語形容動詞の概観
2. 同形語としての漢語形容動詞「異常」について
3. 日本語教育における〈形容動詞〉
4. 国文法における〈形容動詞〉
5. 漢語形容動詞語幹の名詞性についての検討
6. 漢語形容動詞の語幹と名詞の類似性

おわりに

はじめに

形容動詞には「静か〈ナ〉, 穏やか〈ナ〉」のような和語系, 「便利〈ナ〉, 有名〈ナ〉」のような漢語系, 「ハード〈ナ〉, スマート〈ナ〉」のような外来語系, 「ありがた迷惑〈ナ〉」のような混種系があり, これら四種の中で漢語系の使用率は形容動詞全体の七割近くを占める。漢語系形容動詞は, 中国の漢字を借用し日本語の体系に同化する過程で形容動詞の性格を持つに至ったのであるが, これらの漢語語幹は現在の中国でも同じ表記(中国では簡体字を使用しているが)を用いた「同形語」として, 日・中両国において同一の単語が使用されている。同形語は由来を同じくしながら, 現在では意味・用法が異なる部分も多く, その差異は日本語と中国語の言語体系や文化や表現方法の異なりに拠って生じたズレと考えられる。本稿2節では, 同形語の中から「異常」という語を取り挙げて, 日・中語の意味・用法のズレを考え, そのズレが和語の意味範疇や使用領域とどのように関連しているかを検討してみる。

形容動詞が持つ性格は, 形容詞や名詞との品詞論上の比較において, その類似点や相違点が単純ではなく, その性格を定義づけるには種々の論ずべき問題がある。それに関しては, まず3節で日本語教育では形容動詞をどう位置づけて教えるかを述べ, 次いで4節では国文法での形容動詞についての問題点を, 特に名詞との関連において検討してみる。その結果, 3節と4節を通じて, 形容動詞の性格と問題点がより明確な輪郭をもって浮かび上がるものと思われる。

形容動詞の漢語語幹が名詞性を持つことは従来から言われていることではあるが、5節では、70の漢語語幹を取り上げて、名詞性の有無を具体的に検討する。特に語幹と名詞との決定的な違いが格助詞を取るか取らないかに拠るという見解については、漢語形容動詞で例外となる語が幾つかあることを紹介して、漢語語幹が格助詞を伴うという点で未だ名詞性を具有していることを指摘する。6節においては、漢語形容動詞の語幹と名詞の類似性を認めながら、和語や外来語語幹の検討及び日本語教育での課題など尚問題が残ることに言及する。

1. 漢語形容動詞の概観

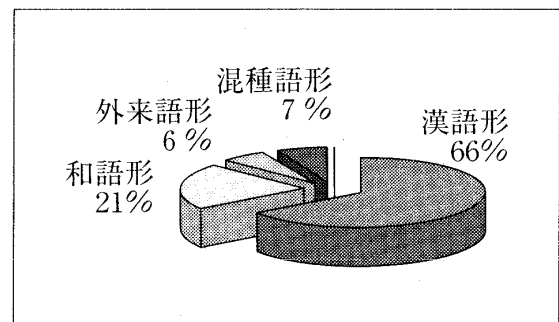
右の(グラフ1)は『岩波国語辞典』における形容動詞の語幹を語種別に示した割合である。形容動詞全数の1,648語の中で「柔和な」のような漢語系が1,096語(66.50%)でもっとも多く、「おだやかな」のような和語系が340語(20.63%)、「モダンな」のような外来系98語(5.95%)、「世間知らずな」のような混種系114語(6.92%)と続き、漢語系形容動詞が全体の3分の2を占めているのが分かる(国立1984:131)。

また、(グラフ2)は新聞・放送で使用される連体修飾語の形容動詞を調査し、和語・漢語・外来語別に割合で示したものである(林1982:79所収)。新聞とテレビニュースのいずれでも漢語形容動詞の占める割合が圧倒的に多いことがわかる。日本語の形容詞の少なさを形容動詞が補っていると言われるが、厳密には形容詞の少なさを漢語系の形容動詞が補完していることが見てとれる。

漢語が日本語の中に導入された最初の状態は、まず概念を表す名詞としてであったと考えられる。このことは日本語に限らず他の言語に外国語の概念が取り入れられる時にはいつも同じである(山田1940:15)。日本語における外来語は中国語からだけではないが、日本語では中国語由来の語彙を特に「漢語」という名称によって他の外来語とは区別している。漢語が日本語の中に取り入れられ、日本語の体系に同化する過程では、発音、語形、文法、意味などの点で、中国語を離れ日本語の体系に同化する

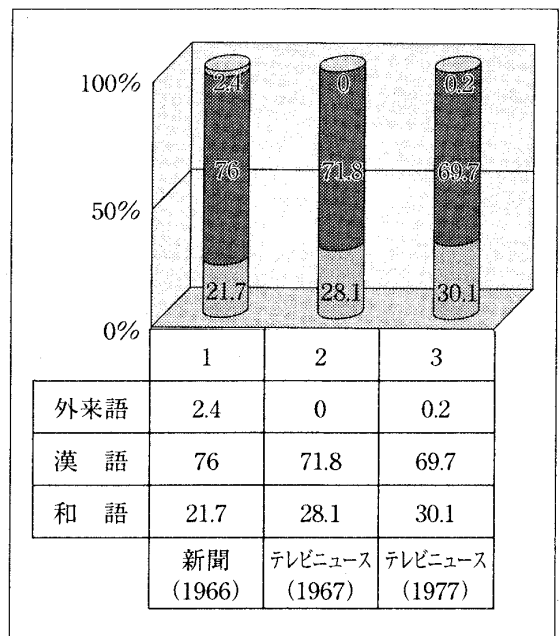
形容動詞語幹の語種別の割合

(グラフ1)



新聞・放送の形容動詞の語種別割合

(グラフ2)



る長い時間と幾多の過程が必要であった。そして、当然なことではあるが、その過程において漢語は中国語の本来の語とはいろいろなズレを生じて日本語に同化する道を行ってきた。そのズレの中には日本人が言語表現において、どのようなことに関心を持ち、何に価値を求めているかが反映されており、日本語の体系にいかにか同化させるかの工夫が施されている。

「抽象的關係」「精神および行為」の分野における漢語形容動詞の語数の割合は、形容詞と形容動詞の合計数がそれぞれの分野で421と693になるのに対して、漢語形容動詞はそれぞれ320と537を占め、その割合は76.0%と77.5%という高さになっている（玉村1975：8-15）。日本語の形容詞が抽象關係の分野に薄く、自然現象の分野に濃く分布されることはこれまでも指摘されてきたことではあるが、76.0%と77.5%という数字の高さは、日本語の形容詞の弱く不足している部分を、抽象的表現に優れた漢語が補っていることを示している。

漢語形容動詞は「元気ナ」や「堂々トシタ（シタル）」の混種語形態であり、形容詞の語彙の乏しいのを補完する形で、タリ活用・ナリ活用として発達してきた。形容動詞の史的形態にはカリ・ナリ・タリの三つの活用があるが、その中でタリ活用の語幹はすべて漢語であり、ナリ活用の語幹にも漢語が多い。カリ・ナリ・タリの三活用がいずれも「ラ行変格」に属するところから、これらの語群を「性質は形容詞と等しいが活用は動詞と等しい」と見做したところに「形容動詞」の命名の由来がある。タリ活用は現代語では「堂々としている」や「堂々たる風采」の形で使用されるが、タリ活用のこれらの語を現代語で形容動詞に入れるかどうかは見解の分かれるところである。現代語の「元気ダ」という形態は「にてある→である→であ→ちゃ→だ」という変化を経て現在の形に至ったものである。

現代の日本語と中国語において同じ漢字で表記される単語を「同形語」というが、漢語形容動詞と中国語の同形語は形が同じでありながら意味領域を異にしている語が多く、その意味では日・中両国語に跨がる同音異義語とも言えるものである。もともとは同一の語でありながら意味・用法にズレが生じているのは、漢語が日本語に取り入れられて後、日本語の構造体系に組み入れられるために、語彙の意味・用法を調整・補完してきた結果である。このことはまた、漢語が補充されて表現できるようになった日本語体系での分野や領域があることを示すものである。現在の日・中両国の同形語の意味する領域を比較すると、「日本語の意味領域は狭くそれも抽象的に偏る」こと「抽象的に同じだとしても抽象性が異なって重なり部分が少ない」こと「喚情価値に差がある」ことなどの差異が指摘されている（大河内1997：417-420）。補足的な例とはなるが、次に、「異常」という形容動詞語幹の日・中両国語での意味・用法について、その差異を検討してみる。

2. 同形語としての漢語形容動詞「異常」について

日本語では「気候が異常だ」「表情が異常だ」と言う時、それは「気候や表情が正常や平常とは異っており、尋常ではなく普通ではない状態」を意味する。またこの語を用いた文

は、話者が「おかしい」とか「へんだ」とか「怪しい」という異変に対する不穩の気持ちの評価を込めて発言した表現となる。それに対し、中国語での“气候异常”“神态异常”は、単に程度を表して「程度が普通とは異なっている」という状態を述べているに過ぎない。日本語では「異常」は具体的な事物とは結び付かず、「～な努力、執着、警戒心、興奮状態、精神、体験、熱意」などの精神状態や、「～な事件、動き、現象、好況、成功」などの事態の結果状態や、「～な気象、発生」などのような自然現象の被修飾語として用いられ、極めて抽象的な事態について形容して用いられるのが普通である。したがって「異常な人」や「異常な先生」「異常な家」のように具体的なものを修飾することはほとんどなく、そのような用法は稀だと言えるが、たとえ用いることがあっても、その場合には姿・形や外観を形容して「異常な」というのではなく、形容しているのはその人の精神や行動や、その物の構成などの中味や形態の抽象的な事象についてである。「異常な人・先生」とは、「正常な人間や教師と比べて、その行動や思考のしかたが変だ」ということを意味するのであり、姿や容貌についてを意味するものではない。そしてその表現には、対象に対する話者の懸念や不安が表れて、否定的で負と感じる感情が込められている。

中国語では〈异常（異常）〉が“头脑异常聪明（頭が非常にいい）”や“他的口齿异常清楚（彼の言葉は格別にはっきりしている）”のように、その語がもともと肯定的な評価を含意している語彙を修飾することがある。しかし、日本語にはそのような用法はない。日本語では「賢明・聡明・優秀・立派・伝統的・眉目秀丽だ」や「みめ麗しい」といった肯定的な評価を含意する語彙を「異常に」が修飾して、程度を表すことはない。使用されることがあるとすれば、それは話者の事態への評価を表すためだけであり、事態に対する異常さを訴えて強調するためである。

「異常」における日・中両国語の違いは連用修飾において特に著しく、“笛子的声音，也显得异常悲凉（笛の音もひどく悲しげである）”や“感到异常地寂寞（非常に寂しく感じた）”や“父亲真是欢喜异常（父はとても喜んでいた）”のような文脈の中で、中国語では状況を客体的に捉えて客観的に描写し、その感情や情意の程度が著しいことを表現しているのに対して、日本語の「異常に悲しい・寂しい・喜んだ」という表現には、必ず話者の感情が投影されており、感情の担い手は主語の人間であると同時に話者でもある。

日本語では形容詞や形容動詞を用いて事物の属性を叙述しても、「この本はおもしろい」「あの話は悲しい」「あの家はへんだ」のような表現には、その事物がその属性を持つことを表現すると同時に、話者の気持ちが投影されて、表現は話者の内的な感情を伴ったものとなる。中国語の感情表現については、「中国語には『悲しい、さびしい、せつない、なつかしい、うらやましい』などにぴったりあてはまる単語がなく、これらの感情表現は動詞的表現であることを特徴として、状況を間接的にいっているにすぎない」（大河内1990：64-65）ということが指摘されている。日本語の感情表現の形容詞は中国語より語彙が多く、日本語の感情形容詞は、主語が第一人称に限られて用いられることが普通であり、第一人称は話者

と重なることが多い。したがって文は話者の感情を反映した主観的な表現となることが多いという特徴は、形容動詞の「異常」の場合にも顕現する。日本語の「異常」という語の用法には、主体の属性・情態を表すと同時に話者の感情を表出するという特徴的な性格が見られるのである。

「異常だ」という漢語に対する和語の類義語として「おかしい」という形容詞がある。「異常だ」も「おかしい」も共に「普通でない状態」を言うが、「異常だ」が道理に適っていない状態を理性的に意味するのに対して、「おかしい」は本能的、生理的な表現である。例えば、次の(1)(2)のaの例の「異常な」を「おかしい」に置き換えてみるとbのようになる。

(1) a. 地震の前には何か異常な現象が起こるはずです。(朝日)

b. 地震の前には何かおかしい現象が起こるはずです。

(2) a. これは異常な事件だ。隠さず伝えないと地域社会が許さない。(朝日)

b. これはおかしい事件だ。隠さず伝えないと地域社会が許さない。

上記の例においては第一に文体上の比較として、(1)(2)の例では、被修飾語である「現象」「事件」が漢語であり、また新聞の文章として後続の文が書き言葉的である点などから、文体のバランス上、「異常な」の方がより適当な語彙の使用であるとは言えるであろう。その上でもなお、上記の文においては、「おかしい」という語の使用も意味・用法上許容されると考える。しかし、aとbを比べると、「異常な」の方が客観的なデータに拠って状況を判断している印象を与えるのに対して、「おかしい」は表現主体の本能的、生理的な印象に拠るといふ違いが感じられる。

前述に、日本語の「異常」を中国語との同形語として見る時、きわめて話者の主観性の反映された単語であることを述べてきたが、「おかしい」との対比においては、「異常」の方がむしろ客観的な表現となる。もう一つ、以下の(3)(4)を例にとり、漢語の「異常」を和語の「おかしい」と比較してみる。次の文のaの述語「異常だ」を、bで「おかしい」に置き換えてみると、

(3) a. 十七才の若者の考え方としてはきわめて異常といえる。(エディプス)

b. 十七才の若者の考え方としてはきわめておかしいといえる。

(4) a. 今までのところは、まだ彼の列車の選び方は、それほど異常ではない。(太郎)

b. 今までのところは、まだ彼の列車の選び方は、それほどおかしくはない。

「おかしい」が「普通と異なる状況に接して心の緊張がほぐれ、笑いたくなるような気分である状態」(森田1988:228)を意味して、感情の直接的・直観的な発露に拠る表現であるのに対して、「異常だ」は分析的、理性的な表現である。一般に、和語と漢語の違いは、和語が情意的・直観的に対象・事態を漠然と表すのに対して、漢語は分析的、理性的に概念を明示して表現するという違いがある。

したがって、「むずかしい」という和語について考えるなら、「むずかしい」は「難解だ。困難だ。面倒だ。容易ではない。見込みがない。頑固だ。機嫌が悪い。」などの漢語の多様

な意味を包含して、(a)「試験・文章がむずかしい」という難易についてや、(b)「解決・合格がむずかしい」というように実現に難易のある状態をも示し、また(c)「父はむずかしい顔をしていた」「太郎はむずかしい子だ」などのように、話者が生理的・直観的に捉えた人間の様子をも含んで、「むずかしい」という語は、属性を語るだけではなく表現主体の感覚で捉えた「たやすくはない」という感情をも総合的に表現する。そのことは感情形容詞の特徴である接尾語「～がる」や様態の助動詞「～そうだ」が、通常は属性形容詞として扱われる「むずかしい」という語に付加することにも現れている。上記(a)(b)(c)の「むずかしい」についての用例は、漢語によっては、それぞれの文脈状況が分析されて、例えば(a)は「難解だ」、(b)は「困難だ」、(c)は「面倒だ」のように異なる語によって表現される。漢語は、語の意味領域が限定されているために、和語に比べると表現の指示範囲が明確であり、描写される概念はより明示的なものとなる。

「異常」は、様態を表す述語用法だけではなく、連体や連用修飾の用法もあることから、典型的な形容動詞の一つであると言える。しかし「異常」は「異常が ある・ない・起きる・生じる」「異常を 引き起こす・感じる」のように、格助詞を伴って名詞的にも用いられる。「異常」に格助詞がつくことは、事態の属性との関係において、「異常」が認識の項目として一つの形成された概念を具有することを示している。また、「異常」に格助詞がつくことは、この単語が日本語の中に取り入れられた当初は名詞の意識であり、「名詞は、根源的に、三種の意味機能を具有している。三種の意味とは、事物と様態と事態とである。換言すれば、国語の名詞は、根源的に「モノ」と「サマ」と「コト」を表現しうる。」(塚原1970:45)ことから、それが述語用法や「異常の～」という連体修飾及び連用修飾用法へと慣用化していったと考えられる。その過程において、属性や様態についての叙述用法を獲得し、形容動詞としての用法を形成していったと理解されるのである。

3. 日本語教育における〈形容動詞〉

日本語教育では、形容詞には2種類あると教えるのが一般的である。名詞を修飾する場合に「おもしろい本」のように語尾が〈～イ〉となって名詞に係る語群を〈イ形容詞〉、「元気な子供」のように語尾が〈～ナ〉で名詞に係る語群を〈ナ形容詞〉と呼んでいる。それぞれが学校文法では〈形容詞〉〈形容動詞〉に相当するものであるが、外国人にとっては双方はともに名詞を修飾するという機能において同じであることから、形容詞として一括して扱われているものである。〈イ形容詞〉だけでなく〈ナ形容詞〉も意味的には性質・状態を表し、印欧語の文法では形容詞として扱われる語群と共通する意味を持ち、文法的機能も似ていることから、〈イ形容詞〉〈ナ形容詞〉を一括して形容詞として位置づけ、それらを下位分類しているのである。初歩の日本語教育で、〈イ形容詞〉と〈ナ形容詞〉の共通点として挙げられるのは次のような項目である。

(a) 名詞を修飾する。

ただし、〈イ形容詞〉は語尾が〈～イ〉となり、〈ナ形容詞〉は語尾が〈～ナ〉となって修飾する。

(b) 述語となる。

初歩段階では〈デス体〉で教えるのが一般的であり、この場合に〈デス〉の扱いには二通りある。

一つは〈イ形容詞〉〈ナ形容詞〉共に〈デス〉を丁寧体と見なし語幹に〈デス〉が付いて述語とする方法である。〈ナ形容詞〉という名称から説明するために語幹という概念を用いなくても、〈元気な〉の形から〈～ナ〉を取った形に〈デス〉をつけると説明する。

もう一つは、〈イ形容詞〉の〈デス〉は丁寧体であり、〈ナ形容詞〉の〈デス〉は名詞の〈デス〉と共に繫辞 (copula) であって、〈イ形容詞〉の基本形〈おもしろい〉は活用するが、〈ナ形容詞〉の語幹は名詞と同様に活用しないと説明する方法である。

否定の場合には〈イ形容詞〉は語尾の〈～イ〉が〈～クナイ〉と変化するが、〈ナ形容詞〉は〈デス〉の部分が〈～ジャナイ〉と変化すると説明する。

この段階までに、〈イ形容詞〉の語幹を〈イ〉を除いた〈おもしろ〉、〈ナ形容詞〉の語幹を〈ナ〉を除いた〈元気〉と提示することで、以後の説明を語幹の形を用いて説明する場合もある。

(c) 副詞的に動詞を修飾する。

ただし、〈イ形容詞〉は語尾が〈～ク〉となり、〈ナ形容詞〉は語尾が〈～ニ〉となって述語を修飾する。あるいは語幹に〈～ク〉〈～ニ〉をそれぞれ伴った形で修飾する。

基本的には、以上の (a)～(c) のことが二種類の日本語の〈形容詞〉の働きとして学習者に提示されるが、副次的な用法として、以下の共通点も示されることがある。

ひとつは、体言と用言の対比になるのであるが、名詞述語文の質問文である「学生ですか」の応答文としては、「はい、そうです」とか「いいえ、そうではありません」のように「そうだ」が代行として使用可能であり、また否定する場合には「いいえ、違います」のように動詞「違う」によって応答を返すことができる。しかし、動詞、形容詞述語文では〈イ形容詞〉〈ナ形容詞〉ともに、例えば「食べますか」「おもしろいですか」「元気ですか」に対して、「そうです」の代行はきかないという性質がある。また、否定の際にも「いいえ、違います」のように答えられない。上記のような質問に対して、動詞、形容詞文では「いいえ、食べません・おもしろくないです・元気じゃないです」のように同じ語彙を繰り返して答える必要があり、このことは〈イ形容詞〉にも〈ナ形容詞〉にも共通して該当することである。

次に、〈イ形容詞〉〈ナ形容詞〉が状態・様態性を表すことは、例えば「仕事はいかがです

か・どうですか」のように「いかが・どう」の疑問詞によって質問がなされ、それに対して「忙しいです」「たいへんです」のような返答が得られることからわかる。名詞の場合には「いかが・どう」は用いられず、「何ですか」や「どんな物・人・ことですか」のような疑問詞で質問され、動詞の場合には「何を・どうしますか」のような疑問詞で尋ねなければならない。

その他、〈イ形容詞〉と〈ナ形容詞〉の共通点として、名詞を派生する場合には接尾語の〈サ〉をつけること、否定形の時には、動詞とは異なり、「元気で(も)ない」「おもしろく(も)ない」のように連用形と〈ナイ〉との間に係助詞を入れることができることなども挙げられる。

一方、〈ナ形容詞〉の述語「元気ダ」は、名詞述語の「学生ダ」と形態が同じであり活用もいろいろな点で似ていることから、教科書によっては〈ナ形容詞〉を〈形容詞的名詞 (adjectival nouns)〉と名付けて、同じ形容詞であっても〈イ形容詞〉とは異なる性格を持つことを説明するものもある^{注1)}。日本語教育において、〈ナ形容詞〉と〈名詞〉の述語形が類似した活用であることを強調することで、学習者には習得がより容易になるという現実がある。初歩の段階では〈ナ形容詞〉と〈名詞〉の述語の活用には次の(a)のような類似点が示される。

(a) 述語の〈デス〉の活用がきわめて似ている。

1. 〈ダ形〉〈ナイ形〉〈ダッタ形〉は同じである。
2. 二種の形容詞や動詞に接続する時には「学生で〜」「元気で〜」のように〈〜デ〉形で接続する。
3. 仮定法では〈〜バ形〉を用いず〈〜ナラ形〉を用いる。
4. 〈ノデ〉〈ノニ〉などの接続助詞の前では〈デス〉は〈〜ナ〉に変化し、理由の接続助詞〈カラ〉への接続の場合には〈〜ダカラ〉となる。引用の格助詞や接続助詞〈ト〉や並立助詞〈シ〉の前では〈〜ダ〉となる。

以上が〈ナ形容詞〉と〈名詞〉の場合に〈デス〉が同じ活用形となるものであるが、異なる場合もある。それは、名詞修飾の時には〈ナ形容詞〉は〈〜ナ〉となり、〈名詞〉は〈〜ノ〉によって修飾するということである。この事実が、〈ナ形容詞〉と〈名詞〉が本来異なる品詞であることの大きな相違点となって学習される。しかしながら、〈ナ形容詞〉と〈名詞〉の〈デス〉の活用がきわめて類似していることは、学習者にとっては、双方の大きな相違点である連用修飾になるかならないかといった違いを凌いで、二つの品詞の距離が近いことを感じさせる。

さらに、〈ナ形容詞〉と〈名詞〉には、学習が進むにつれて次のような類似点(b)が出てくる。

- (b) 1. 〈ナ形容詞〉の語幹の独立性が高く、名詞と同じように格助詞や並立助詞を伴う場合があること。例えば、「元気」「便利」「自由」「平等」などを〈ナ形容詞〉として習ったが、その同じ語彙に「元気がいい」「元気を出す」「便利が悪い」「自

由が欲しい」「平等を願う」のように格助詞がつく。

2. 状態や性質を表すと理解していた〈ナ形容詞〉と同じ語彙が、後続の名詞を修飾するのに〈～ナ〉とはならず〈～ノ〉となる場合がある。例えば、「健康の秘密」「安全のサイン」「幸福の科学」などである。
3. 形容動詞だと意識していた語が名詞のように並立助詞〈トカ〉や〈ヤラ〉などを伴う。例えば「好きとか嫌いとか言われて相手の気持ちがよくわからない」や「便利やら不便やら自分の都合ばかりを言う」などのようにである。

日本語教育では〈形容動詞〉を学習者に教える際に、基本形としてどの形を提示するかが難しく、例えば〈ナ形容詞〉の名称のままに〈元気ナ〉と与えるか、語幹の〈元気〉を基本形とするか、あるいは〈元気ダ〉と与えるか、教科書によって与え方が異なっている。いずれにしても、これらは〈ナ形容詞〉の語幹をどう考えるのか、〈元気ダ〉の〈ダ〉を繫辞と考えるのかあるいは〈元気ダ〉全体を一語と考えるのか、〈イ形容詞〉につく〈デス〉との関係はどうなのかなどと関連して、問題が多い。それぞれの場合によって、その後の教科書の文法説明がどのように変わっていくのか、あるいは教え方にどのような影響が出るのかなどの詳しい検討がなされる必要がある。

〈形容動詞〉という名称との関連で言えば、日本語教育においては〈動詞〉との関連について説明されることはあまりなく、〈形容動詞〉の名称の〈動詞〉の部分は日本語教育では何らの意味を持たないのが現状だと思われる。

4. 国文法における〈形容動詞〉

日本語の文法研究において、〈形容動詞〉という名称が登場するのは、ロドリゲスの『日本大文典』において、西欧文法との比較から生まれた洞察に依るのが始めてとされる。これは外国人学習者を対象とする日本語教育の観点から見ると、たいへん興味深いことである。

形容動詞が一品詞として成立するには、江戸時代以来、ある種の言葉が「意味は形容詞に等しく、活用は動詞と同じ」であるという意識のもとに、論議の対象となってきた経過がある。現在の形容動詞が範疇とする語群について、〈形容動詞〉という名称を用いたのは、明治37年刊の『中等教科明治文典』に、芳賀矢一が「よかり、詳なる、整然たり」などの「カリ、ナリ、タリ活用」の語を、「性質が形容詞と等しく、活用が動詞と等しい」ということから命名の由来として用いたのが最初だそうである（柏谷1973：105）。以後、〈形容動詞〉の名称が定着するのは、吉沢義則・橋本進吉の説が発表される昭和7～10年まで、幾つかの曲折や経過を経てのことであるが、昭和19年に、文部省編の国定教科書『中等文法』が橋本の文法学説に基づいて編纂され、以後、形容動詞が一品詞として学校文法で扱われるようになった。

今日の日本の学校文法では、口語文法の用言を動詞、形容詞、形容動詞の三つに分類して

いる。口語文法においては、形容動詞は形容詞とともに「事物の性質や状態を表す」語として「事物の動作・作用を表す」動詞とは区別されるが、形容動詞は形容詞と形態上、次の点で特徴を異にするとされる。

- (a) 形容動詞は形容詞と活用形式を異にする。形容動詞の活用形はダ行とナ行系列に混じって現れ、形容詞はア行とカ行系列に混じって現れる。形容動詞の活用形は7種であり、形容詞は6種である。
- (b) 終止形と連体形について、形容動詞は形を異にするが、形容詞は同じである。
- (c) 仮定形について、形容動詞は必ずしも「バ」を必要としないが、形容詞は「バ」を必要とする。
- (d) 接続助詞「て」について、形容動詞はつかないが、形容詞はつく。
- (e) 音便について、形容動詞にはないが、形容詞にはある。

現代口語の形容動詞は形容詞との間に以上の相違点が認められるが、(a)～(e)はいわば活用の問題であり職能の問題ではない。以上の差異は形容動詞の動詞との意味用法の類似性にくらべると、例えば水谷の「形容動詞辨」における記述、「口語で詞が賓概念を指す場合の断れつ続きの様」(水谷1951:42)についての結果を比較してみると、形容動詞は動詞との差異が20であるのに対して形容詞との差異は9となっている。このことから動詞との相違性の方がはるかに大きいことが知れ、少なくとも形容動詞という名称がバランスの欠いた不適当なものだとの思いを抱く。また、佐久間(1976:266-277)は形容詞と形容動詞を一括して性状語とし、形容詞だけでは十分に性状表現を成しえないところから口語の形容動詞が発達してきたものとして、形態より意義を重視して、両者を性状表現のための一類の語と位置づけている。形容動詞と形容詞の近似性としては、意味の他に連用修飾として働くことや、「さ」を伴って名詞化すること、また「暖かい」「暖かな」に見られるように語幹の共通するものがあることが挙げられる。

5. 漢語〈形容動詞〉語幹と名詞の異同についての検討

形容動詞を一つの品詞と認めると、形容動詞の語幹と名詞との違いが問題になってくる。形容動詞語幹と名詞との相違点としては以下のような項目が指摘される。

- (a) 形容動詞語幹には主格や他の格助詞がつかない。しかし名詞にはつく。
- (b) 形容動詞語幹は〈～ナ〉の形で連体修飾語となる。しかし名詞は〈～ノ〉の形で連体修飾語となる。
- (c) 形容動詞語幹は〈～ニ〉の形で連用修飾語になる。しかし名詞は連用修飾語にならない。
- (d) 形容動詞語幹は連体修飾語をとらない。しかし名詞はとる。
- (e) 形容動詞語幹は接尾語〈サ〉をつけて名詞となる。

(f) 形容動詞語幹は連用修飾語の被修飾語となる。

上記の項目に照らしてみると、形容動詞の中でも特に漢語形容動詞に条件の当てはまらないものがあることに気がつく。前述した日本語と中国語の同形語を調査する関係上、『新明解国語辞典』の中から70の漢語形容動詞を選び、その用法を上記の(a)～(f)について検討してみた結果、次頁の(表1)のようになった。形容動詞の項目に当てはまるものには○を、当てはまらないものには×を印した。検討するに際しては、『新明解国語辞典』の各語彙項目の一つ一つの用法にあたり調べてみたが、該当する項目について記載のない部分は筆者の判断に依った。(a)については一つでも格助詞を取り得ることがあれば×を印し、(b)については〈～ナ〉と〈～ノ〉の両方を取るものがあることから、両方の場合には「ナ、ノ」を書き入れ、〈～ナ〉だけの用法があるものには○を記した。「?」は判定不能の印である。表中の漢語形容動詞の提示順序は、「朝日新聞1998年版」のデータベースから使用頻度数を調べ、数の多いものから順に並べた。語の右側の数字は使用頻度数を示している。

(表1)の(a)～(f)について、以下の説明を捕促しておく。

(a)の格助詞が付くかどうかを、例えば頻度数11番目の「不安」を例に取って見ると、「不安がつきまとう・残る」などの〈ガ〉格や「不安を感じる・訴える・与える・もたらず・取り除く」などの〈ヲ〉格、「不安に襲われる」などの受け身の〈ニ〉格や「不安から逃れる」などの〈カラ〉格など比較的自由に格助詞をとるものがある。またその他の×印の漢語語幹は、何らかの格助詞を取るものであることを示す。これらが格助詞を取ることは、これらが名詞の特徴である格助詞を伴って述語の補語となる性質を持つことを示している。また、以上の、格助詞をとり得る漢語語幹は、名詞と同様に〈ダ〉のついた形式で述語となり得る。

(b)の項目については、例えば「7.得意」を例にとると、「得意な分野」「得意な学科」などの〈ナ〉による名詞修飾と共に、「得意のポーズ」や「得意の絶頂」のような〈ノ〉による名詞修飾の例も見られる。形容動詞は〈～ナ〉形態によって被修飾語の名詞の属性を表すのを特徴とするが、漢語語幹には(表1)に見られるように、〈～ノ〉を伴って名詞を修飾するものも少なからずある。〈ノ〉による名詞修飾が表す意味は多様である。中には「遅咲きの花」「布製のかばん」のように〈～ノ〉が属性や性質を表すものもある。〈ノ〉による名詞修飾は、本来は、前項の語彙が後項の語彙とどのように関係していくかを示す広範な関係提示を表す機能にある。〈～ノ〉に前接する語が名詞の他に副詞が来た場合でも、副詞が「あしたの仕事」「わずかのお金」「しばらくの休み」のように「時」や「程度」や「量」を表したり、「まさかのできごと」「よもやの事件」のように、後に来る叙述と呼応して話し手の気持ちや評価を表したりするのに比して、漢語語幹の〈～ノ〉の意味・用法はそれとは異なっている。漢語形容動詞の〈～ノ〉の用法は、〈ガ〉〈ヲ〉などの格助詞がつく用法を有するものや歴史的に外来語として導入された時の形態としての用法から考えても、名詞に由来するものと見られ、もともとは、積極的に属性を表さない名詞的な語であったことに拠る

表1 漢語形容動詞の名詞性についての検討

(a) 格助詞がつかない (b) 連体形が「ナ」となる (c) 連用修飾に立つ
 (d) 連体修飾語を取らない (e) 「サ」をつけて名詞となる (f) 連用修飾語の被修飾語になる

語幹	頻度数	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	(f)	語幹	頻度数	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	(f)
1 安全	1908	×	○	○	○	○	○	36 残酷	133	○	○	○	○	○	○
2 健康	1877	×	ナ,ノ	○	○	○	○	37 明朗	122	○	○	○	○	○	○
3 危険	1789	×	○	×	×	○	○	38 厳粛	108	○	○	○	○	○	○
4 元気	1718	×	○	○	○	○	○	39 平穩	108	×	○	○	○	○	○
5 巨大	1123	○	○	○	○	○	○	40 重大	97	○	○	○	○	○	○
6 異常	1096	×	ナ,ノ	○	○	○	○	41 窮屈	89	○	○	○	○	○	○
7 得意	963	○	ナ,ノ	○	○	○	○	42 頑固	84	○	○	○	○	○	○
8 完全	931	×	○	○	○	○	○	43 大丈夫	83	○	○	×	○	×	?
9 真剣	756	○	○	○	○	○	○	44 孝行	81	×	○	×	○	○	○
10 高度	744	○	ナ,ノ	○	○	○	○	45 愉快	80	○	○	○	○	○	○
11 不安	565	×	○	○	×	○	○	46 勝手	78	×	○	○	○	○	○
12 困難	534	×	ナ,ノ	○	×	○	○	47 勤勉	74	○	○	○	○	○	○
13 正直	482	×	○	○	○	○	○	48 無謀	72	○	○	○	○	○	○
14 温暖	472	○	ナ,ノ	○	○	○	○	49 器用	68	○	○	○	○	○	○
15 新鮮	465	○	○	○	○	○	○	50 無口	66	×	ナ,ノ	×	×	○	○
16 豪華	351	○	○	○	○	○	○	51 熱烈	65	○	○	○	○	○	○
17 簡単	349	○	○	○	○	○	○	52 無邪気	64	○	○	○	○	○	○
18 有害	347	○	○	○	○	×	○	53 不可欠	63	○	ナ,ノ	×	○	×	○
19 無理	277	×	○	○	×	×	○	54 柔軟	61	○	○	○	○	○	○
20 貴重	268	○	○	×	○	○	○	55 鮮明	61	○	○	○	○	○	○
21 厳格	246	○	○	○	○	○	○	56 上品	58	○	○	○	○	○	○
22 迷惑	243	×	○	×	×	○	○	57 大胆	56	○	○	○	○	○	○
23 親切	207	×	ナ,ノ	○	×	○	○	58 可能	55	○	○	○	○	×	○
24 誠実	205	×	○	○	○	○	○	59 容易	55	○	○	○	○	○	○
25 深刻	197	○	ナ,ノ	○	○	○	○	60 無心	54	○	○	○	○	×	○
26 慎重	192	×	○	○	○	○	○	61 単純	52	○	○	○	○	○	○
27 確実	172	○	○	○	○	○	○	62 活発	51	○	○	○	○	○	○
28 当然	152	○	ナ,ノ	○	○	×	○	63 無害	51	○	ナ,ノ	○	○	×	○
29 有力	150	○	○	○	○	○	○	64 古風	49	×	○	○	○	○	○
30 乱暴	150	×	○	○	×	○	○	65 軽率	48	○	ナ,ノ	○	○	○	○
31 結構	148	○	○	○	○	○	○	66 静寂	47	×	○	×	×	○	○
32 明確	147	○	○	○	○	○	○	67 素直	47	○	○	○	○	○	○
33 貧乏	139	×	○	×	○	×	○	68 潔白	45	×	ナ,ノ	○	○	○	○
34 大事	136	×	○	○	○	×	○	69 必死	42	○	ナ,ノ	○	○	○	○
35 不自由	135	×	ナ,ノ	×	×	○	○	70 広大	41	○	○	×	○	○	○

と考えられる。

(c) の項目は、形容動詞の典型的な特徴としての連用修飾用法についてであり、大部分の漢語語幹はこの用法を持つ。しかし、例えば「危険」「貴重」「迷惑」「貧乏」など表中の11個の漢語語幹にはこの用法はない。この用法を持っていないことは、これらの語が用言として活用が不備な段階にあることを示している。

(d) の項目は、形容動詞語幹が連体修飾を取らないとされることについてである。漢語形容動詞語幹が連体修飾の被修飾語になるかどうかについては、例えば「大きな不安・困難」や「たいへんな無理・迷惑・乱暴・不自由・無口」「ささやかな親切・平穩」「大いなる静寂」などの語は連体修飾の被修飾語となって、名詞的な機能を持つ。

(e) の項目は、形容動詞語幹が接尾語〈サ〉をつけて名詞となるかどうかについてである。上記の漢語語幹の中では〈サ〉をつけて名詞となるものが多数であるが、中には「貧乏」「大事」のような名詞的機能が勝るためにあえて名詞化の必要がないものと、「当然」「大丈夫」のように陳述の副詞的機能がまさって名詞化しないものと、「有害」「不可欠」「可能」などのように主に情態性を表す述語として機能するために、名詞化しないものがある。

(f) の項目は、形容動詞語幹が連用修飾語の被修飾語となることについてである。形容動詞は属性・様態を表すところから、その語幹は「たいへん元気だ」のように「たいへん、少し、もっと」などの程度副詞やその他の副詞に修飾される。上記の(表1)の漢語形容動詞の中では「大丈夫」を除いてはいずれも連用修飾語の被修飾語となり、いずれも属性・様態を表すという形容動詞の意味・用法を持っている。しかし、名詞の中には、「ずっと奥」「もっと右」のように位置や方向・数量・時間を表すものや、「彼女の方がもっと大人だ」「あいつは他国の犬だ」などのように、「大人」や「犬」は情態性を表して連用修飾語の被修飾語となるものもあり、形容動詞と名詞には近似的な性格が見られることがわかる。

以上、口語の漢語形容動詞語幹を名詞の類似性との観点から比較してきたのであるが、以上の漢語はまず名詞として日本語の中に取り入れられ、形容詞の語彙の貧弱さを補う形で形容動詞として変化してきたところから、形容動詞の構文的な機能に関してはまだ変化の過程にあり、名詞との比較の上でも上記に見たように名詞的機能が未だ残存しているものがあることが指摘される。このことは、名詞述語の〈デス〉と形容動詞の述語形の〈デス〉をどう考え取り扱うべきかという問題と共に、品詞論において形容動詞を一品詞として立てる必要があるかどうかの論点となるものである。

6. 漢語形容動詞語幹と名詞の類似性

国語学では、名詞との近似・類似性から形容動詞を一品詞として立てる必要はないとの「形容動詞否認論」がある。その立場での視野も考慮に入れながら、それでは形容動詞を一品詞と認める立場では、名詞と形容動詞語幹の類似性をどのように考えるのかについて以下

に言及したい。代表として学校文法の見解をとりあげてみる。ここでも本論のこれまでの経過から、漢語形容動詞語幹を例にあげて考えてみる。

学校文法では、漢語の中には名詞と形容動詞語幹の両方に用いられるものがあるとして、例えば「元気、便利、幸福、健康」などについて、次のような例を挙げて説明している。

- (5) a 元気がよい。
 b 彼は元気だ。
 (6) a 便利が悪い。
 b この道具は便利だ。
 (7) a 幸福を求める。
 b 母は幸福な人だ。

上記の例でaは名詞であり、bは形容動詞の語幹である。学校文法では形態上、活用のない自立語で主語になることができる語や格助詞を伴う場合には名詞となり、伴わない場合には形容動詞の語幹だと区別される。上記の例において、名詞とされる語はいずれも事物の抽象的な概念を表している。これらの名詞が形容動詞の語幹とされる語と比較した時、意味上どのような違いがあるのかは、結局のところ判然としない。

通常、形容動詞の語幹は名詞と比べて、「主格に立たない」ことや「格助詞が後続しないこと」を特徴にするのであるが、これに関連して水谷は前掲論文において、「(形容動詞の語幹に格助詞が付かず、主語にならないのは、)言語の表現面に投影して実体と思考したものの概念を主語に表し、属性と思考したことの概念を述語に表す」^{[注2])}と述べている。そして「属性的概念は、属性が実体から分立し実体の賓として再び統合されるものと見るロジックによって、当然実体視せられ難い。この故に属性的概念を指す語はそれが度々思考の対象となって容易に実体視出来る習慣が成り立っていない限り、格助詞がつきにくく殊に主語になりにくい」と記している。要するに、形容動詞の語幹に格助詞がつかないのは、「格助詞が実体視された概念を指す語につくものだからなのだ」(水谷P. 44)と述べているわけである。漢語形容動詞の一部については、前掲の(表1)に見たように、格助詞がつくものもあるところから、そのような漢語形容動詞の語幹は、未だ属性が実体から分立しえないということに拠ると考えられる。いずれにしても格助詞がつくことは、漢語形容動詞が名詞性を具有している事実を示すものである。また、漢語形容動詞語幹は属性・様態を表すのを典型とするが、名詞の中にも次のような場合には、同一の語がbの例では属性・様態を表しており、この用法においても、漢語形容動詞語幹と名詞との類似性が認められて、両者の用法の違いを判然としがたいものになっている。

- (8) a あの山は高い。
 b 数学は5ページが山だ。
 (9) a 私のおばさんが来ている。
 b 彼女はもうすっかりおばさんだ。

(10) a 友人にすごい見栄っ張りがいる。

b あいつはすごく見栄っ張りだ^{注3)}。

学校文法では「元気」と「だ」を分けずに、「元気だ」という一語をもって形容動詞とみなすが、一語だと見なすことの効用は機能の統一的な把握による日本語の文法体系の整備にあり、「語幹を共有する七種の語形を、一個の単語として、統一的に把握しうることである。そして、一個の単語と認定することによって、動詞および形容詞とともに、用言として、統一的に理解しうることである」(塚原1970:41)という塚原の考えに代表される。しかしながら、「～だ」で一語だと見なされる形容動詞が、国語辞書においては他の用言とは異なって語幹だけが提示されるのであり、一語だとしながら文体の違いによって形容動詞には「元気です」「元気である」という語が別種あると認めることなどにおいて、〈デス〉の用法とも関連して、文法上、全体に整合性に欠けていることも事実である。

いわゆる「形容動詞否認論」に立つ見解の一つとして、「形容動詞の語幹を名詞と並んで体言の中に属させるべきもの」と見なす立場に山崎良幸がいる。山崎は「形容動詞は文法上妥当でない」との主張から、形容動詞を語幹と語尾の二語として、語幹は体言、語尾は指定の助動詞〈ダ〉と位置づける。そして、「しかし語幹は名詞とは多少性質を異にしており、名詞が実体概念を表すのに対し、これは情態性乃至は様態性の概念を表わすものと考えられるので、特に情態詞という品詞を設定して、名詞、代名詞とともに体言の中に属させることとする」(山崎1965:237)と述べて、従来の形容動詞の語幹を「情態詞」として体言の中に新しく設定することを提案している。そして形容動詞の語幹と名詞とを比較して、それぞれの性質機能をつぎのような相違点と共通点から記述している。(山崎1965:260-261)

1. 情態詞は名詞、代名詞とともに体言に属し、とりわけ名詞と並んで、名詞が実体的概念を表すのに対して、これは情態性または様態性の概念を表わす。
2. 情態詞は、もともと情態性の概念を表現するので、意味的にもしばしば連用修飾語として用いられることになる。
3. 情態詞はまた指定の助動詞「なり」「たり」によって表現される言語主体の判断の対象となり、従って文の述語となり得る機能を持つ。

山崎の記述には名詞修飾の場合に情態詞が〈～ナ〉によって修飾する場合と、〈～ノ〉によって修飾する場合の違いについては特に言及されていない。

終わりに

以上、漢語形容動詞の語幹が名詞と類似することが多いところから、どのように扱って考えることが妥当であるか、特に日本語教育を考えた場合、どのように説明し教えていくことが妥当であるかなどについて検討してきた。一つの解決策として上記の山崎のような見解に立つことが挙げられる。口語文法において、和語・外来語・混種語系の形容動詞語幹は、漢語

の形容動詞とくらべて日常語において独立性を実感することは少ない。日本語の学習対象者である外国人が、名詞を形容するものはおしなべて形容詞だと理解する文法観を持っていることが多いこともあり、情態詞としての品詞概念によって、日本語教育の文法体系を整えることにはまだまだ検討しなければならない課題がある。今後、和語系や外来語系や混種語系の語幹についても調査研究を進めていかなければならない。

また、日・中両国語の同形語の意味・用法の異同についての研究を進めることにより、日本語における漢語と和語の表現上の役割分担についても、より明らかにする必要がある。それらの研究により、形容詞と形容動詞の性格や、文体・表現論における意味・機能の違いもさらに明確になってくると思われる。

注

注1) 例えば, “Learn Japanese” East-West Center Press, Honolulu (Vol. 1-P. 69) や “Basic Structures in Japanese” 大修館 (P. 79)

注2) 「 」内の文中における () で示された部分は、筆者が補ったものである。

注3) 『新明解国語辞典』によると, 「見栄っ張り」は名詞であるが, 「見栄っ張りな人・～なところ」などの用法もあることから, 形容動詞化してきているとも考えられる。

参考文献

- 石綿 敏雄 (1992) 「外来語と日本文化」『日本語学』1992 Vol. 11, 3月号 明治書院
- 大河内康憲 (1990) 「日本語と中国語の語彙の対照」『講座日本語と日本語教育7 日本語の語彙・意味 (下)』明治書院
- (1997) 「日本語と中国語の同形語」『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版
- 飯豊 毅一 (1973) 「形容詞・形容動詞の語幹・各活用形の用法」『品詞別日本文法講座4 形容詞・形容動詞』明治書院
- 柏谷 嘉弘 (1973) 「『形容動詞』の成立と展開」『品詞別日本文法講座4 形容詞・形容動詞』明治書院
- 国立国語研究所 (1972) 『形容詞の意味用法の記述的研究』秀英出版
- (1984) 『語彙の研究と教育 (上)』大蔵省印刷局
- 佐久間 鼎 (1966) 『現代日本語の表現と語法』厚生閣
- 鈴木 泰 (1983) 「漢語ナリ活用形容動詞の史的性格について」『副用語の研究』明治書院
- 竹内美智子 (1982) 「和語の性格と特色」『講座日本語の語彙2 日本語の語彙の特色』明治書院
- 田中 章夫 (1984) 「語種論の課題」『日本語学』1984 Vol. 3, 9月号 明治書院
- 田中重太郎 (1941) 「『特有の』の品詞をめぐって」『国語と国文学』第18巻第5号至文堂
- 玉村 文郎 (1975) 「語彙論から見た形容詞」『同志社大学国文学会』10
- (1976) 「現代形容語彙の構造 —「分類語彙表」の「相の類」の分析—」『同志社大学国文学会』11
- (1985) 「形容語の世界」『日本語学』1985 Vol. 4, 3月号 明治書院
- 塚原 鉄雄 (1964) 「『暖かい』と『暖かだ』」『口語文法講座3 ゆれている文法』明治書院
- (1970) 「形容動詞と体言および副詞」『月刊文法』2の6, 4月号

- 永野 賢 (1985) 「言語論における形容語—動詞と形容詞・形容詞と形容動詞—」『日本語学』1985 Vol. 4
3月号 明治書院
- 林大監修 (1982) 『図説日本語グラフで見ることばの姿』角川書店
- 飛田良文・浅田秀子 (1991) 『現代形容詞用法辞典』東京堂出版
- 松井 利彦 (1982) 「漢語・外来語の性格と特色」『講座日本語の語彙 2 日本語の語彙の特色』明治書院
- 水谷 静夫 (1951) 「形容動詞辨」『国語と国文学』28巻5号 5月号
- 山田 孝雄 (1940) 『国語の中に於ける漢語の研究』宝文館出版

参考資料

- 西尾 実その他編 (1971) 『岩波国語辞典』第2版 岩波書店
- 紀伊國屋書店・日外アソシエーツ (1998) 『CD-HIASK '98朝日新聞記事データベース』
- 金田一京助・他 (1996) 第四版『新明解国語辞典』三省堂
- 菅野 謙 (1980) 「放送・新聞・雑誌の形容語」『NHK文研月報』30-3 (『図説日本語グラフで見ることばの姿』所収)
- (1981) 「新聞広告の形容表現50年の変化」『放送文化研究年報26』(『図説日本語グラフで見ることばの姿』所収)
- 国立国語研究所 (1964) 『分類語彙表』国立国語研究所資料集 6

用例出典

(朝日) = 『98朝日新聞記事データベース』, (エディプス) = 筒井康隆『エディプスの恋人』新潮社, (太郎) = 曾野綾子『太郎物語』新潮社

付 記

本稿は、平成12年度の「甲南学園平生太郎基金科学研究奨励助成金」の助成によりなされた研究の成果である。